

家事に向き合う男性の意識の考察：損得や快苦や繁閑とは異なる規定要因

○須長 史生 (昭和大学)

【問題意識】

男性の家事参加に関しては、これまで量的調査にもとづいてその既定要因を調べる研究が時間の制約や夫婦間の資源の差、イデオロギーの影響など様々な仮説を検証しその実情を明らかにしてきた。他方で、どのような経緯で男性が家事参加をするに至ったか、その時どのような思いを抱いていたのか、といった意識の変化の経緯やその背後の思いなどについては調査手法の性質上十分に明らかにしてきたとは言い難い。性別役割分業の時代を経て、いったんは「家事は女性の仕事」という規範を経由した男性は現在家事とどのように向き合っているのだろうか。インタビューデータを用いることで家事に向き合う男性の、経済的合理性とは異なる意識の水準に照準を当てたい。

【調査資料】

本報告は2020年から2021年にかけて行われた日本家族社会学会による全国家族調査質的調査のインタビュー資料を用いる。このうち、特に自身の家事参加に言及した男性8名のデータを中心に考察を行う。

【結果】

家事をするようになった動機やきっかけは主に子どもが生まれたことにより家事の総量が増えたこと、就労している妻の体力、健康面への気遣い、さらには妻との会話(クレーム)を真面目に受け止めていく中で心境が変化したことなどであった。またかつて母親が家事に関して感情的になった体験や一人暮らしのときの苦労などの経験が家事参加への後押しになったことへの言及も見られた。いずれも妻の置かれた状況を思いやり、自分も家事をするべきだという認識への変化を示している。これら一つ一つは取り立てて目立った現象ではない。しかしそれぞれが男性自身が家庭の中で置かれた状況に鑑みて、自分は何をするべきかを考えている点が特徴的である。

これらいわば理性的な側面からの決意は本人の行動にも表れている。夜勤明けの体を休める時間に家事をしたり、家事のために仕事量を制限したり、中には実際に退職を申し出たりするなど、単なる意思表示にとどまらず実際の行動にそれを反映されている。つまり対象となった男性は金銭もしくは時間的な余裕や快感欲求とは異なる文脈で判断し、家事を遂行していることになる。

【考察】

言及される内容が量的調査で規定要因とされたものと異なるのはインタビュー調査の性質上当然のことかもしれない。しかし上記のことは男性にとっての家事参加が損得や快苦や繁閑とは異なる水準で意味をもっていることを示唆している。彼らが家事参加をするということは、自分が何をすべきかという理性の水準での判断に基づいて家族に対して主体的なかかわりをもつことを表しているのかもしれない。

彼らは家事をすることによって得られる(失われる)対価の話をするのではなく、理性的に考えるようになったきっかけすなわち道徳的なスイッチが入るプロセスの説明をしているようにすら見受けられた。

しかしここまで指摘したことは大袈裟な解釈でも家事をする男性の神聖化でもない。家族やパートナーのために自分の仕事や生き方を制約してきたのは女性にとっては当たり前の生き方であった。男性の家事参加が少しずつ進む現在、家族に対して主体的に向き合う男性も増えつつあるのかもしれない。

本文末左寄せでキーワードを3つまで(キーワード: 男性の家事, インタビュー調査, 道徳的スイッチ)